

2. 蘇れ！新浦安駅前『公共広場』大作戦

まち学習サークル団
(千葉県浦安市)

I. 活動の背景と目的

「よみがえれ！新浦安駅前『公共広場』大作戦」(以後、「大作戦」)は、JR京葉線新浦安駅前広場の利用とデザインを市民が主体的に考え、自主的に提案を作成することを目的に実施された活動である。2001年6月～11月の5ヶ月間に、4回の市民ワークショップ、ワークショップを通して作成された提案の展示および市民投票、「公共広場」シンポジウムの三部構成で実施された。これに市内の小・中学校各1校が、小学校は六年生の総合学習の時間、中学校は三年生の選択社会の授業で取り組み、活動に一貫して参加した。「大作戦」の主催は、まち学習サークル団(以後、サークル団)と称する市民グループであり、浦安市内に居住する建築・都市計画関係者および小中学校教師、浦安のまちづくりに関心を寄せる教育関係者、学生など14名で構成されている。

「大作戦」が活動対象とする新浦安駅前広場(以後、「駅前広場」)は、1988年にJR京葉線が暫定開通した折に整備された広場であり、一帯は東京湾の埋め立て事業後整備された市街地である。「駅前広場」も面積約2ha、歩車分離がなされ、植樹も豊かに施されたわが国でも有数の駅前広場といえる。

しかし空間(ハード)としては優れたこの駅前広場も、現在、一日約2,700台の自転車が駐輪し、あたかも駐輪場の様相を呈している。このような現状に対しては、高齢者や障害者の歩行の安全性、景観上の問題、防犯、社会的公正などの点から不満を持つ市民も多く、浦安市にも多くの苦情が寄せられている。市も「駅前広場」を1996年、条例によって自転車放置禁止区域に指定し、隨時撤去をおこなってはいるものの、十分な効果を上げるには至っていない。



自転車があふれる新浦安駅前

II. 活動の内容

1) 市民ワークショップ

第1回ワークショップ(6月30日；参加者21名＋小学生34名)は、駅前広場を参加者全員で歩くことによって、広場の現状を確認することからはじめた。地図を持ちながらのサーベイは、知識・情報・問題意識の異なるメンバーの認識の共有に大いに助けとなった。ついで小学生の活動成果の発表と中学生の活動状況を報告、その後、サーベイの結果をふまえて現状の課題について話し合い、第1回ワークショップの結論として3つのキー



第1回ワークショップ
参加者全員でフィールドワーク

ワード；「特定財源自転車税」「ちゃんと使えばきれいな駅前広場」「ちゃんと使える駐輪場」が生まれた。



第2回ワークショップ

第2回ワークショップ（7月28日；参加者22名）では、まず小中学生の取り組みの報告をおこない、ついで「広場の概念」について学識経験者の話を聞いた。人が居て、ぐつろいでいて、そこに居ることを楽しんでいることが広場の基本になるということを、参加者全員が共有した。その後、第1回のワークショップに引き続き、現状の問題点を整理し解決方向を探った。公共広場における違法駐輪などの問題の解決には、違法行為を引き起こす原因を除去する（駐輪場を増やす等）ことや、ペナルティ強化と別に魅力的なインセンティブの付与策が提案された。



第3回ワークショップ

第3回ワークショップ（9月29日；参加者17名）では、小学生の取り組みの報告に続き、「広場（空間）の使い方」について、専門家の話を聞き、具体的な広場利用のあり方や、駐輪対策の事例についてのヒントを共有した。その後、課題の整理を行い、提案内容を作成した。コミュニティバスによる中量輸送サービスシステムと、レンタサイクルシステムとの組み合せ案や、広場を気持ちよく使うためのルール作り案、イベントによる広場空間の活性化を図る案、並びに人がほっとできる楽しい広場案等に絞り込んだ。

第4回ワークショップ（10月20日；参加者27名＋小学生34名）では、小中学校の成果発表を行い、引き続きそれぞれのグループごとに提案の細部の仕上げを行った。しかし4回のワークショップだけでは、どのグループも最終プレゼンテーションの作成までにはいたらず、展示会までに1～2回のエクストラミーティングを必要とした。

2) 作品展示および市民投票

ワークショップを通して製作した提案11作品（一般の部7作品、小学生の部4作品）を、新浦安駅前商業施設のMONA一階のアトリウムにおいて一週間（11月1日～7日）展示した。作品展示は、一般市民に対するワークショップ参加者からのメッセージ伝達の期間・空間であり、市民投票はより広い市民意向集約の機会であると同時に、間接的な「大作戦」への参加を促す仕掛けでもあった。

一週間の投票期間中、投票に参加した市民総数は895名である。当初、小学生作品も中学生、大人と同等に取り扱う予定であったが、展示の初期段階にルールを無視した投票が行われるために、やむを得ず小学生の部を設け別扱いとした。

作品展示、市民投票会場は、通勤や買物等で行き来する市民の足をとめさせるには、優れた環境であり、投票者数の多さは、そのひとつあらわれであったといつてよい。また展示会場では、メンバーと長時間議論をする市民も多く、質問も多数投げかけられ、作品展示は予想した以上に強い市民の関心を得たといえよう。しかし、上述のとおり小学生の部を別途設ける結果



第4回ワークショップ
小中学生の成果発表



駅前ビルで作品の展示

となった投票方式、投票管理方法の問題は今後の課題であり、また、展示・投票に示された市民の関心の強さは、反面、それを直接的な参加、すなわちワークショップへの参加に結び付けられなかつたワークショップ内容や方法、広報・宣伝の方法などに対する再検討を求めていといえよう。

3) 「公共広場」シンポジウム

「大作戦」のまとめとして、「公共広場」シンポジウムを開催し（11月10日；参加者31名＋小学生34名）、あわせて市民投票の結果発表と表彰式をおこなった。

投票結果に関しては、平日は現行の駐輪スペースとして広場を利用する案（「人の集まる広場案」）にもっとも投票数が多く、ついで貴重な駅前広場に「みどりの丘」を築き自然空間として再生させる案（「みどりの丘を創ろう案」）の得票が多いなど、市に対し寄せられる苦情などに鑑みて意外な結果となった。

シンポジウムは都市計画・まちづくり・哲学の各分野の学識経験者および浦安市長がパネリストで参加、普遍的問題として広場利用とデザイン、公共性、自転車問題などが議論された。



シンポジウムの様子



表彰式

III. 活動の効果と今後の課題

1) 「大作戦」に対する評価

●市民の評価

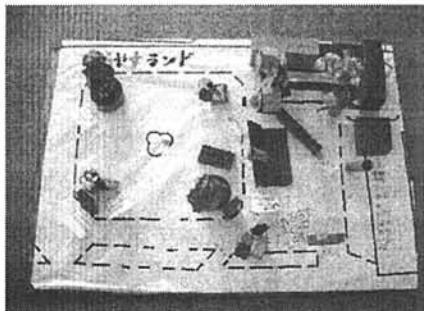
参加者にワークショップに関する五段階評価アンケートを実施した。全ての質問に対して五段階中最下位の評価はなく、80%近い人がワークショップを楽しみ、まちに関して新たな課題を発見できたと回答している。また、他の参加者と議論するなかでまちの課題を共有することができ、提案の満足度も高く評価されている。

展示会場において行った来場者アンケート調査では自転車問題そのものについての回答が多く、今回参加しなかつた市民にとっても関心の高い問題であることがわかる。しかし展示作品に関して高く評価するものの、その実現性の低さを指摘するものも目立つ。また、こうした活動を通して子どもを教育していくことの必要性が強調されている。

●子ども・生徒の評価

担当教師が実施した小学生に対する観察およびヒアリング調査（「大作戦」やそれと連携した授業に関する調査；2001年6月～11月）の結果によれば、子どもの中に「市民と対等な立場であるという意識の構築」がなされ、これは『『大作戦』を通して普段触れ合うことの少ない市民と関わり、意見交換が可能であったことに加え、自らの提案に対して市民から高い評価を得たことによる』と、この活動の意義が認められている。また、「地域の課題に直接触れる中で、市民とは『同じ問題を抱える仲間』という意識が子どもの中に芽生えた」との評価もえられた。

一方、中学生に関しては、担当教師が自由回答方式により中



小学生の提案作品
「浦安ランド」

全体的にきれいな景観を目指したプラン。樹木を多く取り入れ、海の生き物を身近に見られる水槽やキャラクターをデザインしたゴミ箱を設置。水路を新たに設け、ライトアップする。

学生の「大作戦」に対する感想を収集、分析している（2002年2月）。それによれば、「中学生は地域の身近な課題に触れ、また市民と共に活動する中で、地域に対する新たな発見や地域の課題に対する関心が生まれ、自らの意識が変化したことを自覚している」ことなどが指摘されている。

●教師の評価

サークル団でも教師へのヒアリング調査を実施し（2002年3月）、教師の視点から見た「大作戦」に対する評価と課題を得た。「大作戦」と連携することにより、授業を通して、地域で実際に起きている問題を扱うことができ、さらに子どもと教師だけではなく市民とともに学習できるという点で、学校の中では学習し得ない事柄を多く学ばせることができたと評価している。

また、子どもの学習成果に対して通常の授業と違い、教師からだけでなく、市民からも評価が行われ、子どもにとって学習の励みになった点が成果として挙げている。

一方で、スケジュール調整の難しさが課題として挙げられている。学校全体の時間割を優先する必要があり、臨機応変に「大作戦」への参加を進めることができない。今後は、選択教科や（中学校でも）総合学習の時間でも取り扱い、その上で授業時間数やどの時期に行うかを考えていく必要があるとしている。

2) 「サークル団」の今後の課題

●提案の実現性

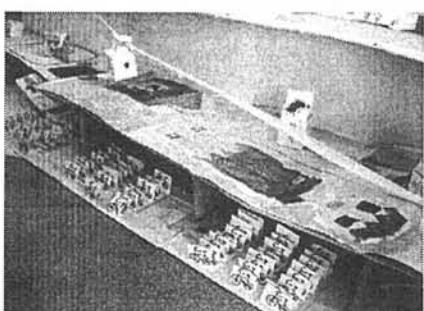
市民提案は、財政面、実施主体などについてはまったく検討を加えていないために、実現性には疑問を残すものが多い。せっかくの提案を「提案」でおわらせることなく、来年度以降はその実現性の検討に製作者とともに取り組みたい。その際、提案のいくつかを社会実験の形で一定期間、実際に試行することを試みたい。具体化方策や問題点の洗い出しありで可能になろうし、なによりも社会実験によって結果イメージをより多くの市民間で具体的に共有することができ、多様な主体がかわる計画においては、このことが特に重要だと考えるからである。

また「大作戦」は行政との関わりをほとんど持たずに行われたが、市民の提案に対して行政も興味を示しており、提案を実現していくためにも、今後は行政との協働関係を作り上げていく必要がある。

●市民と子ども、教師のスケジュールの調整

ワークショップは4回とも土曜日の午前中に行った。これは、学校との連携からやむを得ないことであったが、市民が継続して参加することが難しく参加者を限定してしまうことにつながった。

また、子どもは授業時間を使って参加するため、ワークショップの前半のみの参加に限られてしまうという問題点が



小学生の提案作品

「過去と未来のお祭りだ」

地上や屋上に過去をイメージする「恐竜」のオブジェや未来の「宇宙」をイメージした地上絵を配置。動く歩道やロープウェイもある。駐輪場は地下に。

あった。

それでも今回は土曜日を、市民と子ども、教師とのワークショップに当てることができたが、平成14年度以降は週休二日制が完全実施されることで、正規の授業と市民まちづくり活動との時間共有はさらに困難になっていくと考えられる。これについては、市民と学校とが協働できる時間を、改めて探っていくことにしたい。

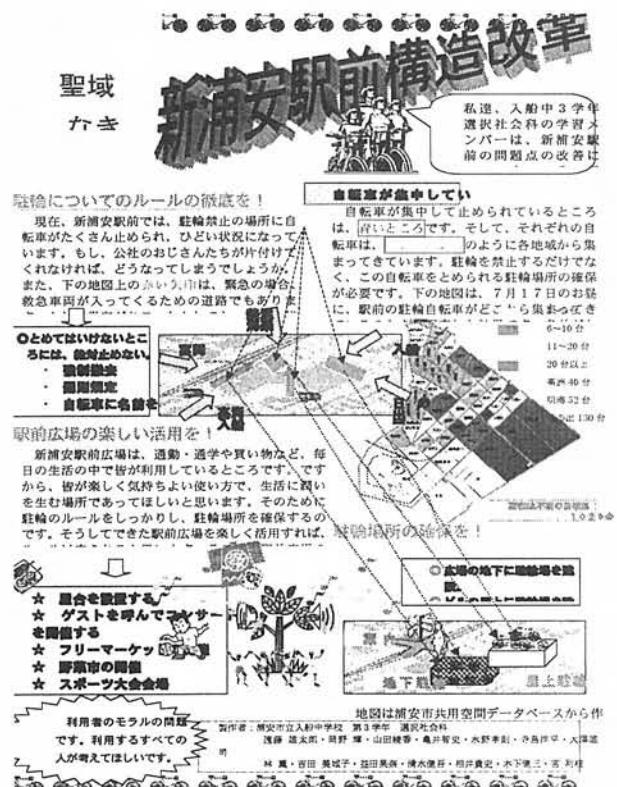
●市民と学校のインターフェースの必要性

今回は、学校とサークル団との仲立ち・調整を行う人材に恵まれ、市民まちづくり活動と学校教育の連携が実現したと言つても過言ではない。しかし、今後、継続的に特定の人物がインターフェースとして存在することは期待できない。この多様な主体の間に立って調整することが可能な定常的な仕組みと場づくり（例えば「まちづくり学習センター」など）の検討を進めていきたい。



市民の提案作品

「みんなで気持ちよくつかうためのルールをつくろう」
駐輪に関するルールをつくるが、守らない人はこの広場の管理人「空気抜く蔵」さんにタイヤの空気を抜かれてしまう。



中学生提案作品
「新浦安駅前構造改革」
実際に広場周辺の駐輪自転車の所在を
調査して、提案をした